

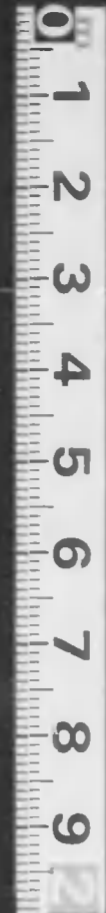
寫眞週報

情報編輯局
三月十日・第二十六號・第七

昭和二十一年三月十日
第三十六號
第一頁
第三十六號
第一頁



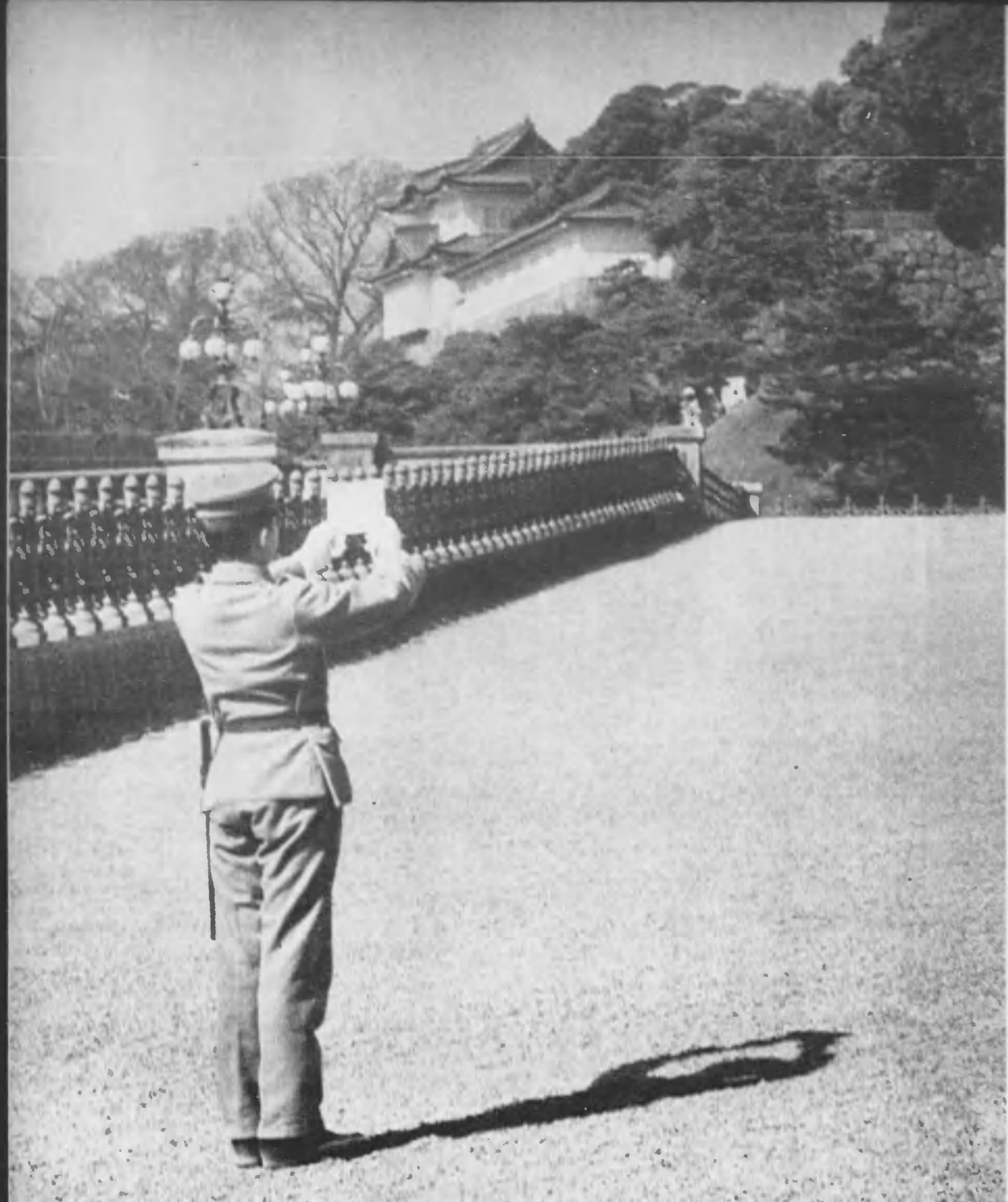
陸軍
記者



撃^うちてし止^やまむ

撃^うちてし止^やまむ

撃^うちてし止^やまむ



撃ちてし止まむ

醜の御槍の
御誓ひ

宮城に對し奉つて音吐
朗々『軍人に賜りたる勅
諭』を奉唱してゐる陸軍
幼年學校の生徒、陛下
の股肱たるの矜持と覺悟
を身體一杯に輝かせてゐ
る姿だ

そのかみ神武天皇が長
髓彦御討伐の際に
みつみつし 久米の子等
が 垣木に植ゑし葦、口
ひびく 吾は忘れじ 衆
ちてし止まむ

と將兵の士氣を鼓舞遊
ばされ、將兵また『撃た
ずば止まじ』の攻撃精神
に燃え熾つた
この氣魄をうけついで
三千年、『撃ちてし止ま
む』は大和男子の血潮に
脈搏ち、國難來るごとに
爆發した

醜の御槍たるを誇り笑
つて草むす屍とならん意
志。うちに潜む烈々の國
魂が火華を散らす逞しさ
わが民族の決戦精神
『撃ちてし止まむ』の凝集
をこの幼年學校生徒の姿
にみる



撃ちてしまわむ

断じて 撃つ

すすす、がくん、舟艇がつひに敵地に乗りあけた。息詰る緊張が、新たな闘魂に盛りあがる待ちに待った瞬間だ。煙霧にとちこめられた身邊の空気を、悲鳴に近い金屬音で、敵弾がひき裂いてゆく。かーん、かーん、舟艇を射抜いてゆく敵弾が水煙と沫をあげて水面につきささる。一人々々の兵隊が一丸の熱火となり、敵陣に炸裂すべく突進する……

香港島へ、コレヒドールへ、壁のやうに遮る弾幕を覚悟の前で、皇軍將兵は上陸して行つた。断じて撃つべく、最後の止めを刺すべく。萬死に身を挺し、命を最後の瞬間まで燃えつくして敵を斃さねば止まぬ撃滅精神に、抗し得るものがどこにあらう



撃ちてしまわむ

なほ残る 片手あり

片手兩足を擽けても我になほのこる左手あり。よしたとひ兩手兩足を擽けても、この命あるかぎり、眼々の鼓動と共に、「撃ちてしまわむ」の闘魂はよつ／＼と沸りたつのだ。思へば硝煙たちこめたあの戦野に、この手、この足を失つたとき、幾人かの戦友は草むす屍と散つていつたのだ。共に死すべくして生き得た命に、今は傷痍の勇士といふ榮譽さへ飾られて再起した自分だ。銃を執ることとはゆるされなくとも、この鐵腕が、この鐵脚が、人一倍の働きをしてくれる。共に散らうの誓ひをはたした戦友よ、見てくれ。この旋盤のバイトに仕上げられてゆくピストリングの二つ／＼が、鋼鐵の武器となつて君の僕の代りに宿敵の息の根を止めてくれるのだ。命かぎり根かぎり、銃後に闘はむことを、戦友よ、君の靈に誓はう



撃ちてしまふ

兵器は

俺が造る

『少年航空兵となつた隣りの三郎さんが初陣に敵機二機を撃墜したさうで、村中の評判はそりや大變なんだよ。』昨日郷里のお母さんから来た手紙にさう書いてあつた。サブちゃんは偉いなあ、だが待てよ、サブちゃんが少年航空兵になるといつたとき、よし、それならサブちゃんの乗る飛行機は俺が造る』と誓つたのはこの俺だつた。そして『頼むよ』といつたのは彼だつた。

サブちゃんよ、俺は造つてゐるぞ。飛行機になくはならぬポールペアリングを。君が手柄をたてたといふ君の愛機のポールペアリングは俺が造つたんだ。サブちゃんよ！ うんと敵機を叩き落してくれ。人生の門出に君と誓つたやうに、俺はあくまで工場で寝るぞ。



撃ちてしまふ

闘志を
土に

『多忙な農閑期は二倍の増収を約束する』——この厚い土の救へを身につけて、平時ならばまだ焚火を囲む冬籠りの農家にも、既に来るべき秋の豊かな稔りを願ふ一年の取闘が始められてゐる。山も野も、道も家も、すべては雪に覆はれて、吹雪の猛る嚴寒の朝も眞黒に燃熱した堆肥を糞に棄せて、兎のほかに汚すものもない純白の野面に運び出す村人たちは、やがてその重い堆肥を凍てつく雪を碎いて降してゆく。

腰の冷えも手の凍えも何んのその、大戦下、日本の兵站基地を確保すべく營々と積み重ねてゆくその勞苦こそ、全國五百六十萬農民の撃ちてしまふ姿でなければならぬ。

撮影 梅本 忠男



撃ちてし止まむ

頭上の水弾

飛び散る火沫を蹴兜にはねかへして、先陣はすでに爆燃する火點をめがけて突進した。後れてならじと、身を躍らせて待避所を出た若く逞しい婦人防空戦士の一人。やにはに一バケツの水弾はわれとわがその頭上に浴びせかけられた。おゝ一團の火焰に體當りの構へはなるその一瞬。一たとへ縁の黒髪は焰に焦げ、わが身一つは火柱となつて燃え上らうとも、いかでかこの尊い國土の空に敵機の狼藉を許すべき。三千年、男々しき久米の子らを生み育ててきた卓國のをみな心はいま燃えさかる火焰の前に美しく昇華する。撃ちてし止まむ。闘魂を黙々と猛訓練に傾けつくして、断じて皇天皇土を護り抜く一億必勝の備へがこゝにある。

撮影 加藤 恭平



撃ちてし止まむ

夫の遺志を生く

今日お習字の時間に、臨時教材で、陸軍記念日の標語を書かせてみた。二年生にはむづかしいとは思つたが、よく言葉の意味を話してやると、子供心にものみまふたらしい。尋かに床を滑いて、眞剣な手帳たすの面ざしを思ひながら、一字、一字に事丸をつけてやる。「おとていさま」ふいと、夫の面影が心の片隅をよぎる。サツチャンの健全な発想、前ずかなほろ／＼とした喜びが身軀を包む。「自分は日本一の空を撃ちて止まむ。をたぐひとすおに大団に散つた夫、その切ない遺志をわたしの胸に、サツチャンの胸に、こめてわたしは、戦へたすおにも前みこみ、受けついでけるのだ。

撮影 仙波 謙



闘魂
兵農一如

イヤー、トウ！
全身全霊を打ち込んで、
裂帛の気合もとも練出
した必殺の一撃！田圃へ
の往きを、脚りを利用し
て、貫空つけた農兵が神
武鎌成のひとときでよる
こは新潟縣の岩山
村、昨年の春、村長の提
案で鉄剣道による村民の
錬成が企てられ、村の
辻々に桑の假標と竹槍が
備へつけられてからは、
人も牛も、敵も、肥桶も
この假標の前を無難に通
り過ぎることを許されな
い鉄剣道に生きる村だ。
いまも練出された手
練の一本は、見事、假標
の心臓部を貫いて、農兵
の面目まさしく躍如！
かくて一年三百六十五
日、雨の日も風の日も培
はれてゆく強靱な一人
一人の力を結集して、全
村米穀撃滅へ！健兵健民
の備へはいよ〜固〜

撮影 梅木 忠男



撃ちし止まむ
三勇士の
後をつぐ

昭和七年二月二十二
日、廟行頭の激戦でわが
一兵一等兵江下、北川、
作江の三勇士は爆弾をか
かへて敵鐵線網に飛びこ
み、見事に血路をひら
いて壯烈な戦死を遂げか
！爆彈三勇士、あの鬼神
も哭く闘魂は、今日もな
ほ脈々と我がますらをの
胸に傳はつてゐる……上
海事變から十二年、あの
時、母の膝に乳をのんだ
子孫たちは、今日では國
民學校の上級生になつた
。或る日の放課後、東京
都の青松寺前の三勇士像
に三々五々、子供たちは
バケツと雑巾をもつて、
ほこりにまみれた勇士の
身軀を洗ひはじめた……
ていねいに、ていねいに勇
士の肩に觸れ、勇士の膝
に觸れ、その心に蘇へる
ものは、勇士の後をつぐ
嚴肅な大和魂のをさな
心にふくらむ思ひだつた

撮影 空月 文吾

エリヌ

畫 一陸山横



コノテキヘイハ、
ニシ、アメリカノ
ハタラフンドシニ
シテキマス。ヨク
カンガヘテカラク
レヨンドヌツテゴ
ランナサイ

エリヌ

畫 介進川石



コノテキヘイハ、
ニシ、アメリカノ
ハタラフンドシニ
シテキマス。ヨク
カンガヘテカラク
レヨンドヌツテゴ
ランナサイ

進



第一〇三三部隊
陸軍一等兵 齋藤芳郎

第二信

クリスにて
一月十一日

お母さん
上陸以来最初の雨でした。夜もすがら、椰子や檳榔樹の青葉をたいて、雨は激しい地鳴のやうに降り籠めたのです。この晩私等は、バラックにおける第一回目の戦闘直後の疲れた體を、サンホセといふ小部落の民家に横たへながら、甘蔗島のあたりから起る潮のやうな葉ずれのさわめきを聴いてゐました。

一月九日の朝は、ナチブとマリベレス山の上半身を包んだ低い雲の塊が、白々と明るい清涼の戰場をやらかく覆つてゐました。四方から、ナチブの左側で、十センチ口径らしい敵砲兵が活動を始め、友軍の前線あたりしきりに黒煙を噴きあげてゐます。バラックで停場にした比島兵のジョレンは、あの弾着はオラニ附近だと思ひますが、われわれは今日はおさまで前進するのですか、としきりに心配してゐました。

十時かつきりに、私等の部隊はしめつた砂地の道を進撃しました。デナルピヤンを出た丁字路の手前で、先頭の車輪が止りました。背を伸ばして見ると、右手に通じる壊れた橋を修理してゐる列から、第二分隊櫻木上等兵、吉野の二名負傷しました。と沈痛な聲で報告してきました。敵の彈着は、距離が非常に近づいた。観測所の背後に固定された。影山の、方向よし、遠く百メートル、といふ報告を聴くまでもなく、敵砲兵は最近のところに近づいてきてゐるのです。あと百メートルを詰めれば、観測所は砲撃の標的になります。先時から影山の報告を胸の中で計算してゐた中隊長が指揮小隊長に言ひました。

「この調子だと、観測所に命中するまではあと十分間はたつぷりある。十分間のうちに、食ふか食はれるか、こいつとわたり合ふんだな」
そして放列係の通信手に電話を渡さなければならぬ。だがその時、通信手の藤澤上等兵が、受話器を耳から離し、中隊長をまよゝめながら、突然ずろ／＼と涙を流すのです。駄目か、切れたのか、と中隊長が叫びました。

「補給に行つてきます。中隊長様」と藤澤上等兵がやに／＼と立ち上りました。馬鹿、お前は任務が違ふ、と中隊長は怒鳴りつけておいて、藤澤の室に待機してゐた通信手の田中を呼び、観測所の状況だ、と短く命令しました。

「返事ただけで、田中は中隊長に一禮すると、作業場にゐた者等に約くやうに弾を投げつけてから、急いで階段を下りて行きました」
通信線の修補が成るまで、私等は建物の陰に退避することになり、全隊裏庭に下りました。

工兵隊の兵隊等が、壕の中からしきりに赤旗を振つてゐるのを見て、ヤがて砲撃が起つて虚空から金屬性の弾道音が通り、前方の甘蔗島に炸裂しました。同時に先頭の車輪が四輪ばかり、矢のやうに丁字路を互に走り抜けました。すると壕の中の素木の椰子の丁兵隊が、椰子の葉に飛び出し、はた／＼と作業を始めました。二分後に工兵隊は壕の中にもぐりこみ、先頭の四輪車がエンジンを強めて行動開始を待つ。前と殆んど同じ場所に敵砲が炸裂し、四輪車が爆風を突つ切つて丁字路を出る。工兵が橋の上に躍りあがり、一人が私等の方を眺めてにや／＼笑つてゐました。

サンイシドロ附近の一軒屋に到着したのには十一時を少し過ぎた時刻でした。一軒屋は道の左側の、椰子とバナナの樹に囲まれた二階造りの洋館でした。このあたりは地形が極めて悪く、他に観測所を設置することが困難なだけに、私等は白いトタン屋根が敵の恰好の目標になるのを覚悟の上で、洋館の二階を観測所と決めたのでした。

案の定、私等が二階から更に梁に上り、鐵槌で屋根の斜面に穴をあけてゐると、敵弾が観測所の左側方に凄まじい炸裂音を轟かし始めました。敵の先に先を越されたのです。も／＼／＼／＼してはゐられませぬ。ガラスを砕き、硝子と硝子があたり一面を飛び、硝子が壁や屋根に突き刺さりました。炸裂の度に起る地震と爆風で體がふら／＼になるので、私等は窓に近づいて外からの石の落段の陰に、一かまきりになつて身を押し寄せてゐました。

硝子のついた中隊長が、露臺の影山に、危なかり下りて来い、と注意しました。大した、と影山が答へました。敵弾には技路があるんだぞ、そんなところに立つておられたらたぬだ、俺の頭へ来い、俺の頭へ来い」
中隊長がくす／＼笑ひながらどなりまわした。その聲の響きの中に、ふいに私は中隊長の深い愛情を感じ、思はず胸がつか／＼しましたが、ヤがて、親友等や上官と、身を寄せながら、一團となり、う／＼と死の岐路に立つてゐるのだといふ意識が不思議に安らかな静寂と、また／＼かいかい



ん。穴の中から眼鏡の首だけ出して、その砲兵がすくなく砲撃を繰り返して捕へ、直ちに射撃が開始されました。すると、まるで待たせてゐたかゝやうに、ナチブの左側の、椰子とバナナに似た、椰子の葉のあち／＼から、思ひがけに敵の砲撃が起つてきました。

「中隊長本陣の観測手が、私の側で屋根を以てかまきりながら、指揮隊長がそれを制した。敵に射つてくれと言ふやうなものだといふのです。たつた一箇の眼鏡で敵にたす向はねばなりません」
雲が切れて、陽がぼんやりと輝き出し、また、右手に屹立するナチブ山と、その左側からマニラ灣に推がれてゐるならかな敵陣一帯の高地は、目眩むばかりの鮮やかな緑の光を放つてゐます。○倍の眼鏡の中に、それはまるで生物のやうにむく／＼と盛り上つて見えるのでした。

友軍の○部隊や○部隊が、観測所の左方陣地から射撃を始めました。發射音と弾着音が折／＼と交錯して、虚空に充滿しました。

砲兵は少くとも九ヶ中隊の兵力です。敵は地の利を得てゐる上に、偽装が巧みで、全然砲撃すら発見できません。半ばはカンで方向を測定して二階の作業場に報告し続けましたが、それでも頻々と射撃してくる新しい砲兵を次ぎ／＼に掴みとることは出来ないのです」
観測所の五百メートルばかり左前方にある○部隊の放列が、最初激しい敵の集中砲火を浴びてゐました。附近の甘蔗島が火を發し、爆煙のあとから、鋭い黒煙が煙のやうにのたうちながら立ち上つてゐます。その時は、ともすれば眼鏡の視界をぼや／＼と遮つてしまふのです。放列ではそれにも屈せぬ

額を私の胸に湧きた、せてくるのでした。私等は皆黙つて、静かに呼吸する間に本能的に頭を伏せてゐました。腕の時計を見ますと丁度十二時なのです。私は噴きまわした。先刻からの激しい戦闘の中で、一切の時間の経過を忘れてゐた私は、少くとも三時頃にはつてゐると信じてゐました。

そのうちに敵の弾着が次第に間近になり、九、六分ほど経つてからは、上射撃が止まりました。敵は別の目標に方向を変へたらしいのです。私等はほつ／＼と、敵は来たといふ安堵が、一息に私等の喉はつか／＼と船内の血を融解しました。か、その安堵がやがて激しい反撃心に變りました。私等は立ち上りました。たが来た通信線の連絡はついてゐないので、射撃が出来ません。中隊長が坂本を再び補給に出しました。

「おは、私等の中に、ジョレンの姿の見えないのに氣付き、建物の右手の方に何気

ず盛んに射撃を繰り返してゐました。ヤがて敵弾は、徐々に射撃を右に移動して、次第に私等の観測所に接近してきてました。作業場にゐた中隊長が、本部の影山上等兵に、弾着を測れ、と命じました。弾着の移動で、敵の意圖が私等の観測所を脱つてゐるか否かを測定しようといふのです。影山は立ち上ると大急ぎで裏手の露臺に駆けあがり、同時に、と叫ぶ影山の聲が、梁の上の私にまで、何か地の底からの絶叫のやうにしん／＼と徹つてくるのです。

敵弾は三門になつてゐました。爆風が嵐のやうに甘蔗島をなぎ倒し、破片が虚空をきり／＼と掠れ去ります。また椰子の葉や枝々を買いて、乾いた音が針のやうに鋭く耳をうつつのです。私はひどく興奮してゐました。トタン屋根を突きつける太陽の熱氣からはかりでなく、私は全身熱っぽい汗に塗れてゐましたが、不思議に聴力だけは鋭くなつてゐて、破片に貫き飛ばされて地上に落ちるかすかな椰子の葉の音や、私の眼の前の虚空に舞ひ飛んでくるちぎれた枯葉の断片すら、凄まじい、破片の轟音を伴つて、く／＼と私の全身を締めつけてくるのです。

第一、第二の目標を制壓して、第三の目標に方向を変へた時、放列から砲車小隊長が電話してきました。

「今放列は敵の三門砲兵に火又されてゐます。弾着が近く、破片が砲身に当たつてゐます」

「射撃が進行できるか」
中隊長が受話器をとりあげてどなりまわした。

「出来ませぬ！ 砲手はすごい元氣です」
射撃が進行されました。が間もなく、放

なく歩いて行きました。すると一株のバナナの樹の根方に、背をもたせかけ、膝を折つて横坐りの恰好をしたジョレンが、蒼白な顔をして、下腹に手をあてて、如何にも苦しげに呻つてゐるのです。どうしたんだ、ジョレン、と私は驚いて側へ寄ると、彼は力なく手を振つて

「構はないで下さい、いゝんです」
と遠慮なくに吐きました。

「腹が痛いのか」
と聴くと、さうです、と背くので、ちや、あつちへ行かう、衛生兵に薬を貰つてやるから、と私は彼の肩に手をかけましたが、彼は頑強に動かないばかりか、突然私の兩脚にしがみついて、激しく泣きじやくり始め、とき／＼の聲を絞るやうにして

「私は怖い、死ぬのが怖い」
と絶叫し始めたのです。

ジョレンの絶望的な言葉から、私は瞬間一切を了解し、同時ににはげしい憤りに捉はれました。ふと、ジョレンは私等とは全く違つた人間で、しかも作場といふ卑屈な立場に置かれてゐる人間であることに思ひ至り、次第に哀れになつてきました。

「もう弾は来ないよ、ジョレン」
と私はどなり、恐怖の意識で衝動的にけいれんするジョレンの兩掌を解き、背段の下に戻りました。

補給から歸つてきた坂本は、中隊長の前に半分もきとられた戦闘帽と、眞黒に焼け焦げた受話器を差し出し、田中が戦死しました、と言ひました。この二つの品の他には、何も残つてゐなかつたといふのです。私はいまの先、補給を命ぜられて出て行く際に、私等を二階、田中の約くやうな弾を思ひ出し、照準を覗き込んでゐました。

時立の活用の例

指示板に動力を

長野 幅 忠次

長野県白田町の稲荷町通りである。雑貨商の菊原廣太(四十歳)さん、娘の雪子(二十歳)さん、お前の指示板へ時の立札を書き移して来た。

「大東亞戦争の日」の朝である。木更山から運搬に半つて来た平八さんが、牛をとめて、しほしほを聞きながら、平八さんが行くきよつたあと、今度は白田国民学校の生徒達が、前庭に集まり、受持の先生に引率されて前を走りかゝった。

引率者は井出先生だ。その指示板の方に眼をうつして

「若ん、此處へ集まれ、一と兒童達を指示板の前に集めて井出先生は

「さあ、先生がこれを讀むぞ、皆んな一緒にあとをつけて高い聲で言つてごせよ」

「時」の立札

もつと飛行機を前線將兵が血で叫んでゐる翼の増強へ、最後一億の國魂を叩き込ませよう

一日も早く、そしてより精強なるものを

稲荷町常會

「皆れがたつたか、いさよと、もつと飛行機を造つてどしどし戦地へ送らなくては行けないのだ。敵のアメリカは澤山の飛行機を、いま休みなしで造つてゐるから、日本もこれに負けまいやうに早く造つて出さう」とい

「さうだ、無駄な買物はしないで献金したり、公債にして、一機でも多

「先生、ロカリマス」

「はい、機水君、言つて見給へ」

「お小遣を、使はナイで愛國債を、金」



警察用指示板に

一ノ瀬正直

大東亞戦争開戦以後、毎朝私の目を射る「時」の立札を何んと多くの人に讀ませたいと思ふ心で、私をして、登に今迄に「時」の下げてあつた官像が、タ、等の派に書寫し、一番人通りのある警察用指示板に思ひ切つて

貼つけさせたのですが、足を停めて讀んでゐる過客を見かける度、これほど自分なしたことを誇りを感じたことはありませんでした。その後、停車場等へ買ひつけたボスターもなく、ある項、駐在所の承認を得て直接指示板に白黒で書き、やうになつたので、私

「局内新聞」はもとく「從業員の激戦」のためのものです。大東亞戦争以來「時」の立札を加へて戦地の兵隊さんに送つたところ、非常な親しみをもちて送られ、關係のない部長までも讀んでくれたといふやうな報告と共に、「寫眞週刊」の「時」の立札はよかつた、或る部隊ではこれを唱和してゐるといふ便りや、續々と来る禮狀には非常に感觸が連ねられてゐます

同組回覧の區情報に

大東亞戦争局長 田中英一

(前略)特に「時」の立札は自己反省に裨益するは元より國民の指導思想上に好例のものとして、町會初め各種演説の講演會、座談會等の席上引用致し居る實狀に有之候處、特に「時」の立札「時」の立札の國を引裂いて、遂に海底に没入するの愚は、一億國民の正に肝に銘じ、眼を致し可き警句と思料致し、當局刊行「北花」に登載之、普及徹底を圖り次第に御座候。右區域は區内四千五百の隣組を通じて、二十方國民の國策の浸透實踐を促すと共に、戦時下の區内町會、各種團體の動靜を周知、以て國民進軍體制を確立するため、毎月一回五千部を隣組回覧として刊行致し居るものに御座候(後略)

局内新聞に轉載

北海道十勝支庁大村町郵便局 大石 博

當郵便局では「寫眞週刊」が到着すると「時」の立札を大書して公衆手に掲げてゐるが、毎月一回發行する時寫版印刷の「局内新聞」には表紙裏に、また記事の中に、或は裏表紙に轉載してをります

大東亞戦争日誌

二月

十五日 ●(一)ソロン群島方面、二十日以前同十五日までの航空戦において帝國海軍航空部隊の空戦並に陸軍地上部隊の砲火により敵機六十四機撃墜、一機撃破せり。この間我が方の損害、飛行機二機、軍用施設の損害輕微なり。(二)西南太平洋方面、二月一日以降同十五日までの航空戦において帝國海軍航空部隊の空戦並に陸軍地上部隊の砲火により敵機五機撃墜、二機撃破せり。この間我が方の損害なし

十七日 ●帝國海軍航空部隊は二月十七日ソロン群島サン・クリストバル島東方において敵機送艦隊を攻撃し、驅逐艦二隻および大型輸送船一隻を撃沈せり。この間我が方三機を失へり

二十一日 ●帝國陸軍部隊は佛國政府の諒解の下に二月二十一日廣州灣佛國租借地に進駐せり

●帝國海軍航空部隊は二月二十一日長編ニューヘブライズ諸島エスピリット・サント島の在泊艦艇及び軍用施設に夜間攻撃を加へ、敵艦運糧一隻を撃沈、一隻に大火災を生ぜしめ、陸上施設にも損害を與へたり。我が方被害なし

印度の友を救へ

印度救援國民大會 東京

暴虐イギリスの鐵鎗を断ち切つて敢然インド獨立のため立ち上つたカンチー翁以下の苦闘するインドの友を救ふべく二月二十七日、東京歌舞伎座に「印度救援國民大會」が大政翼賛會、興亞同盟、朝日、毎日、讀賣各新聞社の共同主催で開催された。インドの敵は我等の敵である。アジアの仇敵イギリス撃つべしアメリカ撃つべし、インドの友を救へと、奥村情報局長、水井翼賛會興亞局長の熱心に幾千の會衆は改めて、撃ちて止まむの決意を固めたのであつた



日本の支那に對する横濱インド獨立聯盟の人々



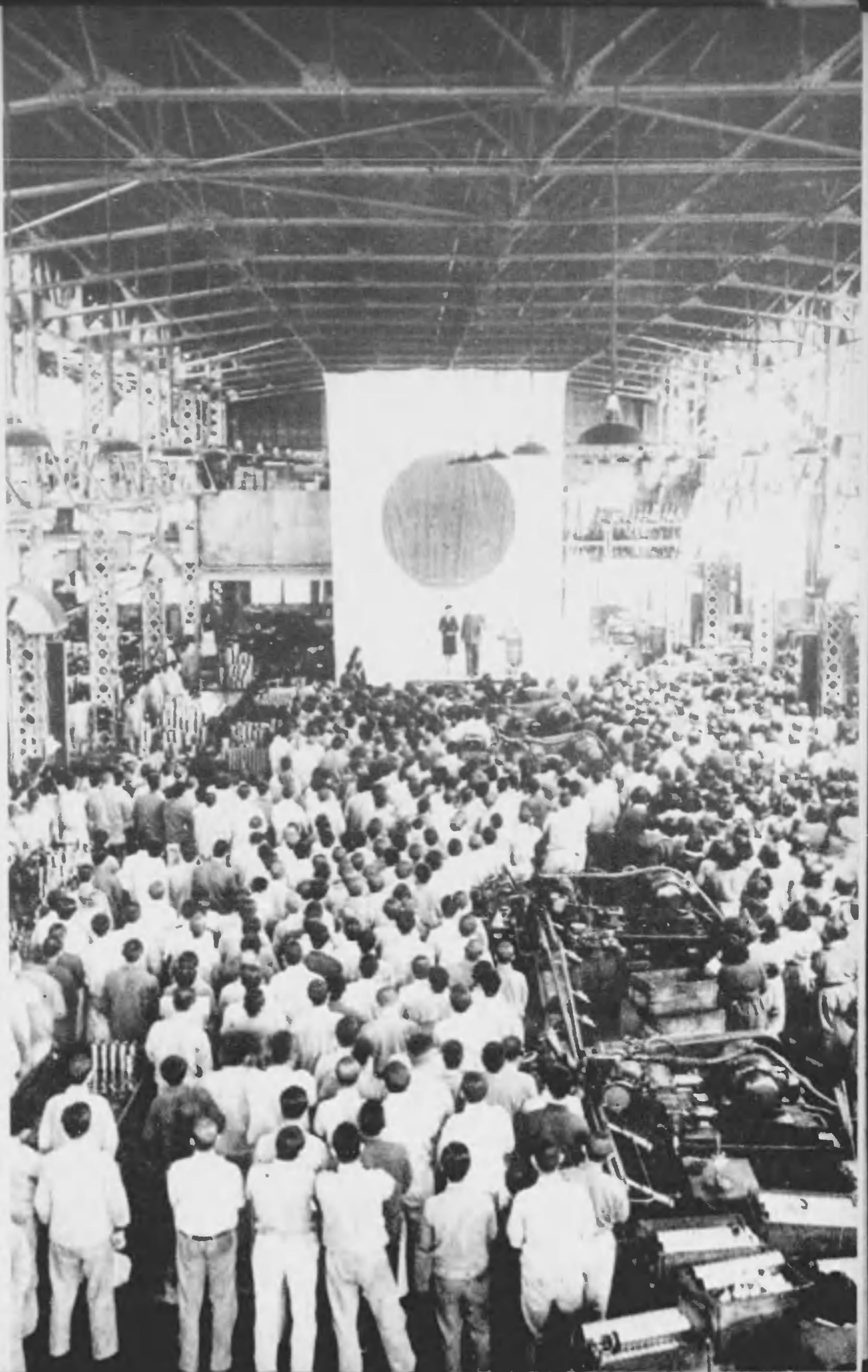
熱帯を攝る水井翼賛會興亞局長



カンチー翁を語る水井翼賛會興亞局長



産業第一線に激励隊 京東



戦場がそのまゝ、激動の戦場となり、会場を埋め盡した産業戦士たちは、重体みの時間を利用して隊員の歌手と共に唱ひ寸暇を惜しく過ごした

宵々火を吐く激動の戦に、今更ながらのやうに女工員たちは責任の重大さを自覚し、やるわいの決意を満面に浮べてゐる

歌手も戦士も一體となつて、海行かばの合唱のうちに、撃ちて止むの決意が自ら高まつてゆく

危大なる消耗戦に備へ、決戦的作戦に應ずる軍需物資の生産増強を實現することは、産業人に與へられた輝かしい使命である

されば産業陣営の第一線部隊はこの重大使命達成のため、日夜汗と油にまみれ、轟音と熱火の渦の中で、堂々たる決戦のハンマーを振つてゐる

この第一線部隊を激励し、さらに撃ちて止まむ敢闘精神に、共に奮ひ起つたらと東京商工会議所会頭藤山愛一郎氏を團長とした職場激励隊は二月二十二日から一週間、連日産業第一線部隊を激励した日本精工〇〇工場を訪れた激励隊員一行は産業戦士の一団として、互ひに手をとつて誠意を披瀝し合ひ、その労を稱ひ、士気を鼓舞し、共に感激と信頼の決意を固め勤勞殉國の崇高なる職場精神に徹した

藤山團長は烈々と産業戦士を鼓舞激励した

健全微笑は明日の、いや、寸刻後の職能率を高める。激励隊員の獨唱に聞きはれる女工員はわれを忘れるゝ





⇒ 楽しい夢は早くもあの町、あの村へ。舞臺の製作がはかどります

⇒ 美しく明るい童話の世界を願ひながら描きながら

⇒ 演出の仕方でも栗津先生のご指導でなかなか上手になりました

弘と雀

女學生自作自演

芝居の紙

女高二第立府都京

モミヂのやうなお手々を叩いて……良い子よ育て、やさしく強く

居徒生



⇒ 紙芝居のセンセイがいらした、うれしいな



⇒ 物語のハナコちゃんと一緒になつて心配したり喜んだり

紙芝居は子供たちの世界の太陽です。青天井のもとで、くる日もくる日も無條件でこれに喝采を送る幾百万の少國民の姿を想像するだけでも、明るいものを感ずるではありませんか

京都府立第二高女のお嬢さんたちは、この紙芝居を教材に子供たちを立派な大國民に育て上げませうと、作文の時間に創作した日本の新しい童話を國畫の時間に楽しく描きあげ、手工の時間に最後の舞臺を製作して、附近の幼稚園や兒童保護院を訪問、手風琴入りで熱辯をふるつてみましたが、お嬢さんたちがほんたうに一箇の生命をも可愛がつて注ぎこむこの愛の教育は、いつか子供たちとの間に優しい心のつながりをつくり『氣は優しく力持ち』の良い子、強い子の育成に大きな効果をおよぼします

撮影 石東長一郎



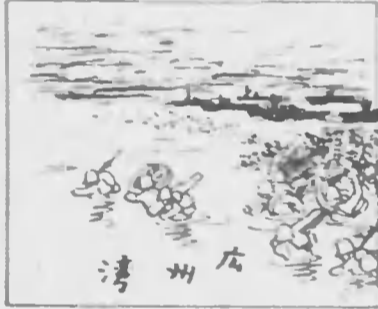
沈黙を演る米のヘンモロソ



然雷ドノイ全で因危-ジツカ



敵目へアリスセル家空米



津州店



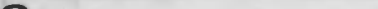
上進選へ潤州高地借租佛



るさ沈撃艦水滞の大般カリマ



上上遊界租へ府蔵スシラフ



威脅を路通米てし翔長鷲海



沈黙を演る米のヘンモロソ



然雷ドノイ全で因危-ジツカ



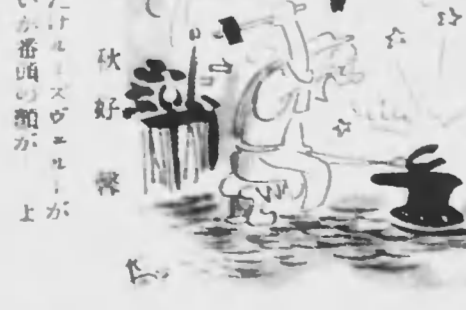
敵目へアリスセル家空米



津州店



上進選へ潤州高地借租佛



るさ沈撃艦水滞の大般カリマ

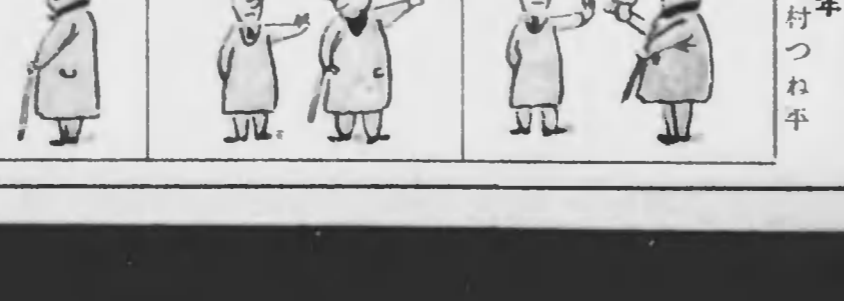


上上遊界租へ府蔵スシラフ



威脅を路通米てし翔長鷲海

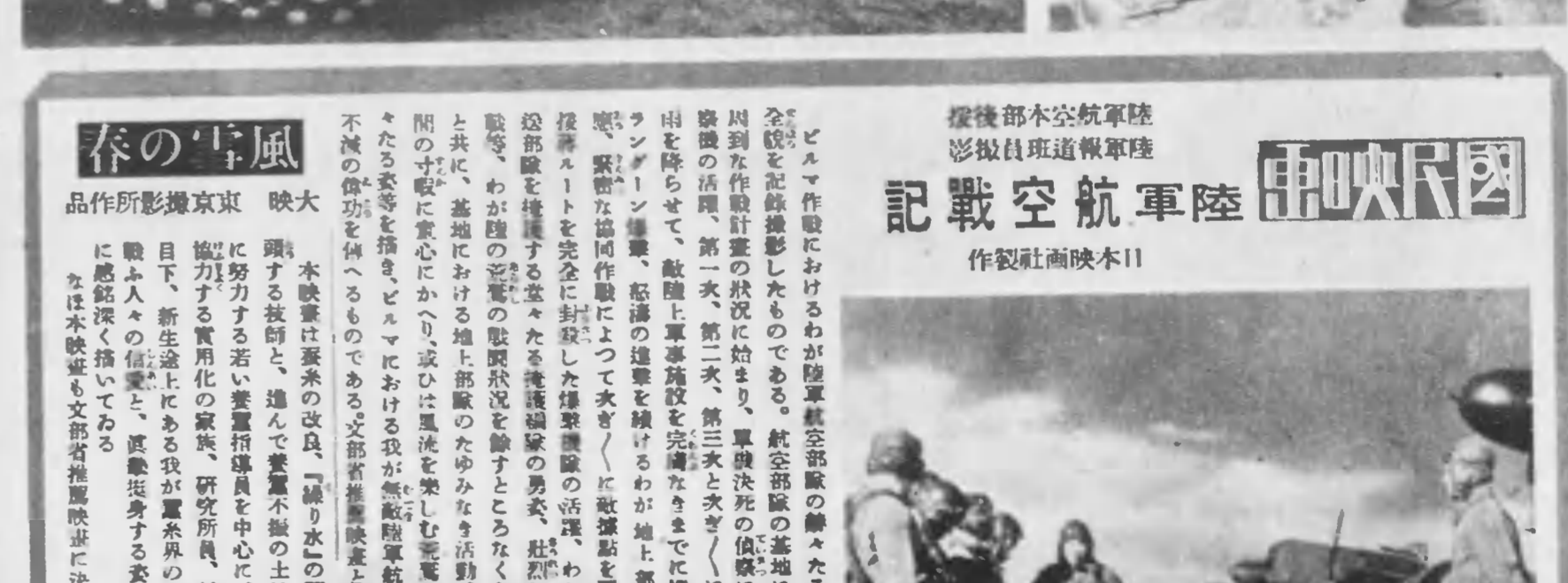
昭準器
新衣料切符は神頼へ
大野 綱三
『そこら、置てもやたらに使ひたくなるから、かうして奉納しておかう』
『そりやい、あへだわ、今年は半分以下で済ませませう』



お嬢さまも前線へ
志村つね平
『お嬢さまも前線へ、別れになつて淋しいでせうけれど、兵隊さんをお慰めするためよ、がまんしてね』

同じ飼ふなら
山川 哲
『軍用犬で應召した太郎の後継ぎですわ、これも一寸訓練生活でせう。奥さん』
その手ゆるめば
白路 徹
『貴方のその手がゆるんだら、お嬢の腕力がにぶりますよ。お嬢は、ホラ私が強ませさせていただきます』

見込まれた青年
志村つね平
どうやらね、太郎のまんかね、勝つまではッ
お嬢さまも前線へ
志村つね平
どうやらね、太郎のまんかね、勝つまではッ
お嬢さまも前線へ
志村つね平
どうやらね、太郎のまんかね、勝つまではッ



受室
女學生部隊の一日入營
京都市 藤井 忠久
戦ふ日本の女學生として兵隊さんたちの生活を身をもつて味はつておきたいと、京都商業女學校の本年卒業生六十餘名は二月十八日、中部第三十七部隊に一日入營し、召された父や兄が入つた空門を感懐も深く見學したのち、引續き營内に勇ましい分隊歌調練を繰り返しました

ビルマ作戦におけるわが陸軍航空部隊の戦々たる武勳の全貌を記録撮影したものである。航空部隊の基地における周到な作戦計畫の状況に始まり、軍機決死の偵察に赴く偵察機の活躍、第一次、第二次、第三次と次々／＼に百機の雨を降らせて、敵陣上軍事施設を完全なまでに破壊したラングーン爆撃、怒濤の連撃を続けるわが地上部隊と呼聲、緊密な協同作戦によつて次々／＼に敵陣を覆滅し、援軍ルートを完全に封鎖した爆撃機の活躍、わが海上部隊部隊を支援する堂々たる護衛隊の勇姿、壯烈なる空中戦等、わが陸軍の戦況を餘すところなくとらへるのと共に、基地における地上部隊のたゆみなき活動、敵陣の間の寸暇に實心にかへり、或ひは風流を染しむ軍醫の餘情、々たる姿等を描き、ビルマにおけるわが無敵陸軍航空部隊の不滅の偉功を傳へるものである。文部省推薦映画と決定した

春の雪風
品作所影攝京東 映大
本映畫は要米の改良、「練り水」の研究に邁進する技師と、進んで養蠶不振の土地で地味に努力する若い養蠶指導員を中心に、これと協力する實用化の家族、研究所員、村人など目下、新生活途上にある我が置米界の第一線に戦ふ人々の情愛と、眞摯挺身する姿を、躍動に感銘深く描いてゐる

本映畫は要米の改良、「練り水」の研究に邁進する技師と、進んで養蠶不振の土地で地味に努力する若い養蠶指導員を中心に、これと協力する實用化の家族、研究所員、村人など目下、新生活途上にある我が置米界の第一線に戦ふ人々の情愛と、眞摯挺身する姿を、躍動に感銘深く描いてゐる

本映畫は要米の改良、「練り水」の研究に邁進する技師と、進んで養蠶不振の土地で地味に努力する若い養蠶指導員を中心に、これと協力する實用化の家族、研究所員、村人など目下、新生活途上にある我が置米界の第一線に戦ふ人々の情愛と、眞摯挺身する姿を、躍動に感銘深く描いてゐる

本映畫は要米の改良、「練り水」の研究に邁進する技師と、進んで養蠶不振の土地で地味に努力する若い養蠶指導員を中心に、これと協力する實用化の家族、研究所員、村人など目下、新生活途上にある我が置米界の第一線に戦ふ人々の情愛と、眞摯挺身する姿を、躍動に感銘深く描いてゐる

寫眞週報 昭和十八年三月十日 第三種郵便物認可 昭和十八年三月十日發行（毎週一冊）郵政省登録 第三六六二號

第十回 特別報國債券

一等割増金 五百円
一枚・一円



賣出

3月1日より 4月30日まで

大藏省 逓信省 日本勸業銀行

内閣印刷局印刷發行

前線慰問に本誌を
お読みになつたら本
誌を前線慰問に送り
ませう。送料は内地
と同様で封封あるひ
は開封にして第三種
と明記すれば、一部
一銭です

所 達 申	定 價	情 報	寫眞週報 (發轉歌)
全国各地官報 販賣所 書店・郵便店 新聞販賣店 寫眞材料店	一部十錢 (送料一錢) ▲外島郵送は依 る地域は送料 共一部十九錢 ▲陸約配送御希望 の方は一部十錢 (送料一錢)の割 合を以て前金を 添へ御申込み下 さい ▲特大號の場合は 其の郵費御持込 金より差額を申 受けます	昭和十八年三月 十日印刷發行 編輯者 情報局 東京市豊町一 本町一ノ一 印刷者 内閣印刷局 東京市豊町大土町	寫眞週報 (發轉歌)

(列前報是)A4的規定はより大の書本)